

保莉 実 2004『ラディカル・オーラル・ヒストリー ― オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房

飯嶋 秀治

本書の著者は2004年5月に癌で早逝している。彼は本書を遺著とは見做されたくないと周囲にも語っていたが、本書は既に作家、コラムニスト、冒険家、フェミニスト、文学者、歴史学者、地理学者、哲学者、社会学者、人類学者らの諸氏から好評の内に迎えられており<sup>1</sup>、新刊書評の役割としては、既にその時期を終えたと評者は判断している。そこで本書評では以下を、Ⅰ著者の背景、Ⅱ書籍の内容、Ⅲ接続可能性、の3部に分けて、本書を書くに至った著者の背景と、本書の延長線上にある可能性という文脈で論じる事をご了承願いたい。

### Ⅰ 著者の背景<sup>2</sup>

著者の保莉実の家は、新潟県新潟市にあり、信濃川河口付近の民家の名字には「松波」「難波」など「波」がつくものが眼につき、市内から離れるに従って「米原」「米山」など「米」字がつくものが眼に付くが、彼の父方の姓が「保莉」であることを考えると、こうした風景と苗字の呼応が興味深かった<sup>3</sup>。

父親の信男さんは6人兄弟の次男、母親の桂子さんは2人姉妹の長女で、両親共に地元の銀行に勤め、職場結婚となった。現在も信男さんは桂子さんを「ワイフ」と紹介し、桂子さんは信男さんを「ホカリ」と呼ぶ仲である。「実」は母方の祖父、故芥田一馬氏からの命名だが、姉さんの「由紀」は当時文芸誌に掲載されていた、三島「由紀」夫からとられたという。

こうした挿話からも推測されるであろうように、一家は知的に豊かで洗練された環境にあり、それぞれが本を読んで、興味深い本だと、それを皆で共有し、あれこれ話すのは小さい頃からの習慣だったようである。少年時代の著者は灰谷健次郎の『兎の眼』[灰谷 1974]

---

<sup>1</sup> これまでの評者には、本橋哲也、関根政美、高橋順一、加藤哲郎、池澤夏樹、野上元、鶴見俊輔、今福龍太、辻原登、上橋菜穂子、成田龍一、上野千鶴子、小池民男、阿部珠理、竹内啓一、石川直樹、東村岳史、河野貴代美らがいる。それぞれの書評の書誌についてはウェブを参照願いたい。なお、著者のほぼ全論文が文末のウェブで閲覧できるので、是非参照を願いたい。

<sup>2</sup> 著者の背景については、2005年4月1日に、新潟市で著者の小・中・高訪問から墓参りをした後、御両親宅で行った数時間のインタビューに基づいている。

<sup>3</sup> 新潟の1697年の新潟港の移入物と1711年の移出物を比較すると、移出物の60%以上が米で、全国からの移入物で米が占める割合(40%)を大きく上回っているので[新潟市総務部市史編さん室 1989: 34]、当時から新潟が米どころであったことが分かる。「保莉」姓は「保刈莉」「帆莉」「帆刈」「穂莉」「穂刈」などとも表記され、新潟でよく見かける苗字で、農家の長男以下が都市に出てきて、都市文化を創ったという宮本[1965]の見解に沿う。なお、母方のご両親(芥田家)は浜松出身、桂子さん自身は大阪生まれで、戦時疎開で父方の姉の伝を頼り新潟に来たとのこと。

等の作品に強く打たれていたという。こうした会話は、主に母と姉と彼とで、父が「家族が集まって食事をする部屋を、最も眺めのよい部屋にした」という居間で交わされていた。

現在の住まいに落ち着くまで、父親の転勤が十数回と重なったので、附属小学校に入れたとの事であったが、その附属小学校は（現在の校舎とは異なるが）こじんまりとして小中が一区画にまとまっており、すぐ裏手が佐渡島に見える海がある。著者のエッセイにも書いてあったように少年時代の著者がよく釣りにいていたようで、広くそうした海岸を見下ろす場所には「ふるさととは語ることなし」の坂口安吾の碑と（横田めぐみさんが）拉致された護国神社がある。

高校はその安吾と同じ高校で、校舎はすっかり新しいものになっているが、当時ここで彼は学内にあった体制を見咎め、文芸同人誌で問題提起していた[保莉 n.d.]。彼の視線は、あくまで対話者の視線に沿うものであったことから、親族や周囲での評判もすこぶるよかった、とのことだが、その分、こうした理不尽に思える秩序には徹して逆らったようである。

いずれにせよ、自宅から小中高までは殆ど自転車で全て数十分何に行ける範囲内にあり、多感で興味津々の少年にはやや狭く閉塞的な世界だったのであろう。実際、彼は小学校の時には一人で電車に乗り上野の東京国立博物館に「漢委奴国王」の金印を見に出かけ、中学の時には佐渡島を友人達と一緒に自転車で一周し、高校入学前には奈良・京都を一巡して、かねてから家族の間で話題になっていた梅原猛や司馬遼太郎の著作の痕を感動して歩いていた。

一橋大学では経済学に飽きて、様々な領域の文献に当たるうち、オーストラリア先住民に興味を持ち、オーストラリア先住民の歴史に関する卒論を提出したとき、既にオーストラリアに渡り、将来の留学先を検討していたとのことなので、これが修士直後の留学へと繋がった。

こうして、少年時代からの彼の『兎の眼』の視線、青年時代の暴力による秩序への反発、また一人での巡遊の姿が、修士後のオーストラリア先住民グリーンジ民族調査でのバイクによるオーストラリア大陸巡遊の姿に重なってゆく。

ここからは彼の公的な活躍になるので、彼の研究内容については後にまたⅢ部で立ち返って論じるが、彼が「生涯の師」と仰いでいたのは、フォーカシング<sup>4</sup>の村里忠之さん、グリーンジの長老のジミー・マンガヤリさん、文化人類学のデボラ・ローズさん（デビー）の3人で、彼女の本は自著に先がけて翻訳出版したし[ローズ 2001]、筆者が知る限りでも彼は最後の調査の直前まで、デビーが気にしていたラパポートやエリアーデの日本における最新の研究動向を知ろうとしていた。また普段から「ジミーが魚が空を飛んだと言えば、

---

4 フォーカシングは来談者中心療法のロジャースから出てきた心理療法の一つであり、  
来談者の意識の焦点フォーカスを受態感フェェルト・センスへと促進することから名づけられている[池見 1995]。評者は直接面識はないが、村里さんの背景には西洋史にあるので、その点で著者の歴史的な背景と相通ずるものがあつたことは想像に難くない。

本当に飛んだと信じられる」と家族にも話していたジミーじいさんが他界した時には、デビーにも泣いて連絡があったという。そしてフォーカシングは、彼自身がフォーカサーもできたことから、彼とキャンベラで歓談したときにも、バタイユ、橋本治、ドゥルーズやチャクラバルティらの話と共に出てきた話題で、彼は、アボリジニの歴史実践の際の身体経験に言及し、「アボリジニの身体経験はフォーカシングの際の身体経験に似ているんじゃないかと思う」と語っていた<sup>5</sup>。

そのため病床にあっても「而して生即死、死即生的に、永遠の生命に入ることが出来る」[西田 1989 (1946) : 360]との一句を含む西田幾多郎の『自覚について 他四篇』の読書会を行い、その間数通のメールを（時には姉の由紀さんを通して）知人達に送り、フォーカシングに基づいた絵も描いていた。現在保苺家の床の間に飾ってあるのがそのときの絵で、最初は大樹の大地が冷たく感じてなかなか描けないと言っていたのが、フォーカシングが進むにつれて大樹全体が虹のように輝きだし、大地全体にそれが広がったとのことである。

読書、瞑想、日記と闘病、「勇敢で冷静、そして美しくありたい」と言っていた著者が本著の校訂作業を終えたのは、こうした合間のことである<sup>6</sup>。

最後の最後まで一言も弱音を口にすることもなく、親指を立てて「あんなにりりしい顔をした実の顔を写真に撮っておけばよかった」と母親に言わしめたその瞬間が、医者から、癌がもう胸まで広がっている、と告げられた時だったとの事で、その日のうちに他界した。

墓石は、原発設立の是非を住民投票で決めたことで有名になった巻町は曹洞宗、萬福寺1区にあり、命名した祖父の一馬氏と一緒に眠っているが、この寺は彼が30歳のときに座禅を組みたいと出かけていった寺でもある。

墓石に刻まれた戒名は行月実道禅定門で、現代にあっては、修行の「行」者はこういう形でしか「道」を極められないという意味に、彼が小さい時から臨床の最後まで窓から愛でていた「月」を加えたもので、この戒名には両親も大変気に入られている。

## II 書籍の内容

こうした著者により送り出された本書は全8章から成っており、3章（第2・4・5章）が筆者の博士論文の加筆・修正<sup>7</sup>、他の3章（第1・7・8章）はその後の諸論文の発展的編入、他の2章は他の著書からの巧みな挿入、最後に著者と塩原良和によるあとがきと、

---

<sup>5</sup> 上注の受態感<sup>フェルト・センス</sup>がここで身体経験と言い換えられているもので、アカデミックな歴史学者は歴史を史料の中を探す searching が、アボリジニの歴史実践は風景の中に注意を深くある paying attention とところから始まる、という本書の第1・2章の考察に接続する。

<sup>6</sup> 心理療法から連想すれば、この樹木にバウム・テスト的な表象を読み取る向きもあろうが、評者が連想したのは、寧ろ著者が論じていたグリーンジのcantreeにあるワッティ・クリークの樹であった [保苺 2004d]。

<sup>7</sup> 筆者の博士論文『クロス・カルチュラライジング・ヒストリー』[HOKARI2001]は、全8章本文308頁から成り、そのうち本書に用いられたのは、主に3章84頁分である。

テッサ・モーリス＝スズキと清水透による解説により構成されている。ここでは、紙幅の都合で、著者によるあとがきまでを紹介する。

### 「第1章 ケネディ大統領はアボリジニに出会ったか——幻のブック・ラウンチ会場より」

本章では、ブック・ラウンチ会場での講演という舞台を設定し、本書全体における筆者の立場が「戦略的歴史学者」であることを前提とし、オーラル・ヒストリーの研究動向を整理しながら、本書全体で言われる「歴史」が、「誰もが、ふだんからおこなっているはずの歴史実践」のことであり、それに「注目し、それを大事にしていこう」と目標を定める[5]。

そこで著者が問うのは「誰が歴史家なのか？」という問いであり、歴史学者だけが歴史分析をしている訳ではないことを指摘する。そこで挙げられるのが、「アメリカのケネディ大統領が、グリーンジ・カントリーに来た」という歴史であり、著者自身としてはこれを「メタファー」と分析することも、素朴実証史学として排除することも、また「記憶」や「神話」として、アボリジニの人たちの経験を人類学者のように「無毒化」して「包摂」することさえ避けることを提案する。但し著者はそうした歴史を「本当に書ける」と言いきるつもりはないとしながら、「ギャップごしのコミュニケーション」[27]を可能にするには、歴史経験に真摯に向き合い、世俗主義や実証主義とは異なる「もうひとつの経験主義」[39]を開いてゆくことができないか、と問いかけ、これをラディカル・オーラル・ヒストリーと呼ぶ。

しかしこの著者の講演には、会場から実証主義歴史学者、市民派社会学者、ポストコロニアル批評家らから、良心的な懸念からくる様々な「質問」が寄せられる。こうした対話者との「応答」での問題意識を引きずって、著者は読者をオーストラリア先住民の歴史実践の世界へと誘う。

### 「第2章 歴史をメンテナンスする——歴史する身体と場所」

本章で著者が問うのは「歴史実践とは何か」という問いであり、歴史が過去からもたらされるその様態をグリーンジの老人達の「注意深くある身体」に注意を向けることを提案する[53]。歴史実践は歴史学者のように過去を調査し、探索し、制作する中にだけあるわけではなく、十分に注意深くあることで、「歴史が私たちをとらえ」[59]、私たちは「歴史を聴くし、歴史に触るし、歴史を嗅ぐし、歴史を演じるし、歴史を語る」。そして、こうした歴史する身体が、世界に埋め込まれているのである。

そしてその世界は「全ては大地からやってくる」[62]ドリーミングを起源とし、同時にその維持がなされ、グリーンジ社会の広大な移動空間・開かれた可変的知識体系・「正しい時間」「持続する時間」「同時性」という3つの時間構造に開かれている。こうして、歴史に注意を向ける身体は、あちこちを移動することで、他の諸生物・諸存在者たちとの繋がりエージェンの網目による関係性のうちで、グリーンジ・カントリーでの歴史実践がなされるものと説く。

### 「第3章 キャプテン・クックについて——ホブス・ダナイヤリの植民地分析」

本章は打って変わって、著者が傾倒してきたローズの著作からの翻訳であり、しかしここではローズの分析さえも全て割愛されているため、読者はホブス・ダナイヤリの独白を通じ、彼がキャプテン・クックに始まる植民をどう分析しているか、その歴史実践と直に対面することになる。ここではそのごく一部を引用しよう。

ここはとても大きなカントリーだ。／小さなカントリーではなく、大きなカントリーだ。／なあ。／私たちは、それを所有している。／それなのに、キャプテン・クックは／私の人々になにも話しかけようとしなかった。／もしも奴が、「大丈夫だよ」と話しかけてくれたなら／私たちだって、なあ／私たちだって、うまく話をまとめただろうに[101]。

本章はいわば、それまで主旋律を奏でていた著者の言葉から、グリーンジの老人ジミー・マンガヤリの歴史実践の言葉へと移行するための工夫であろうが、その語りは実に感動的である。

### 「第4章 植民地主義の場所的倫理——ジミー・マンガヤリの植民地分析」

こうして本章では、筆者の主要な歴史家（教師）となり、「彼ら」という第三者関係を「あなた」という二者関係へと転換させるきっかけとなった老人、ジミーじいさんの「歴史の景観」の中に見ようとする。

ジミーじいさんは大地に、西から東へと線を引き、繰り返して著者に「正しい道を歩みなさい」と言ったという。その線で表象された「正しい道」とは同時にジュンダガルというレインボウ・スネーク（ドリーミングのひとつ）の軌跡でもあり、こうしたドリーミングはまた同時に倫理でもあり、それが要するにグンピンの法となる。

こうした西から東へと引かれた線を基準に、白人の学校がいかにか小さく、教育期間も短いのかを並行する短い線で表象し、さらにはこの東西線を遮る南北線をよくないものの表象とする。

そしてまさにキャプテン・クックは北から南へとやって来て、彼らの東西線を「切断」し「法を犯した」ものとされるのである。こうして「イングランド」は線の南に、「鋌山」は線の北に描かれもし、ついには「白人の法が倫理を欠いているのは、それが紙の上に書かれた法だから」で、紙の上に書かれた法は、空間的方位を維持できず、法が毎年変わってしまうことから由来する、とローカルだが正確な洞察を見てとる。

### 「第5章 ジャッキー・バンダマラ——白人の起源を検討する」

さらにジミーじいさんの歴史分析は白人の起源を巡る進化と歴史にまで及んでいたことを明らかにする。

ジミーじいさんは、キャプテン・クック以前に最初にきた白人キーン・ルイス（ジャック

キー・バンダマラ)は複数の腕をもった猿であり、それが生み増やしすることで、白人が生まれたという。つまりそこにはドリーミングから生まれたアボリジニとは異なった起源がある訳である。

こうしてキーン・ルイスはたくさんの本を書き、「すべての愚かな考え」を仲間に教えた。パチンコ、ライフル、撃ち殺し、皮はぎ、妻の殴打と殺害、混血児、アルコール etc、「全ての悪い思想はジャッキー・バンダマラに由来する」という訳である。

こうしたジミーじいさんの歴史語りを「それぞれの地域で行われている歴史実践の諸形式を把握した上で理解する努力」[166]をすることで、「アボリジニの歴史家たちから歴史分析を学び、西洋近代に出自を持つ学術的歴史実践と、先住民グリーンジの歴史実践とのあいだのコミュニケーションの可能性を考察すること」「これこそが、私たち——アボリジニと非アボリジニ——がともに共有できる、歴史経験への真摯さを探索する適切な方法」[167]だと確信し、著者はジミーじいさんがドリーミングは法であり、倫理であると語りつつ、その外に猿としての白人をおくこと、彼が女を娶り、皮剥ぎの職務についていたこと、「ジャッキー」という名前の由来、「キーン・ルイス」という名前の由来に推測をめぐらし、「ヨーロッパ社会がオーストラリアを『囚人の国』とみなしたのに対し、先住オーストラリア人がイングランド(ヨーロッパ)を『不道德の国』と理解した」[176]皮肉にまで至る。

#### 「第6章 ミノのオーラル・ヒストリー——ピーター・リード著『幽霊の大地』より」

本章はピーター・リード『幽霊の大地』最終章の翻訳で、ここではこれまで調査者であったミノが、インタビューイーとなって応えている。

ここでも一部を引用すれば、例えば著者は、「なんで君はカヤ(妖怪——引用者注)を見たことがないの?」という質問に、「だって、そういった怪物たちは、ピーター・リードが実在するように、客観的に実在するわけじゃない」と応えている。「かといって僕の頭の中にだけ実在するわけでもない」「ある次元に実在しているんですよ、それはリアルなんです」[195]。

本章はいわば、第4・第5章のようなフィールドでの歴史実践から戻ってきた後の知覚の変容を挿入することで、続く議論へと移行するためのもう一つの工夫であろう。

#### 「第7章 歴史の限界とその向こう側の歴史——歴史の再魔術化へ」

こうして、第1章に提起されていた問題が、間に挟まれた5章のグリーンジへの歴史実践の考察を通じて、具体的に再度問われることになる。本章の記述は、[HOKARI2002;保苅2003d]を加筆・修正して発展的に編みこんだものであり、「チャクラバルティの『ヨーロッパの地方化』論に依拠しながら、西洋出自の<普遍的>歴史学が直面する歴史の限界、そしてその向こう側に広がる普遍化を拒否する歴史の数々、いわば『危険な歴史』の位相」を明らかにしようとする。

そこでまず、著者は歴史の相対性という文脈において、ポストモダン論争の行き詰まり

を前提とした近年の神話論や記憶論は、まさにそれが「歴史以外の何かを研究していると言うまさにその理由によって」ディシプリンとしての西洋性＝普遍性を何ら脅かすことなく歴史の外部へと排除されてしまうことに警鐘を鳴らし、こうした普遍的な「よい歴史」が受け入れられない「危険な歴史」との間に対話や共奏をうながす可能性を模索する上で（「よい歴史」の全体性に還元可能な「地方史」とは区別される）「地方化された歴史」が露呈する普遍性の限界の向こう側とのコミュニケーションの可能性を模索し、さらにその奥に登場する「よい歴史」に還元不可能な「超自然的歴史」をアカデミックに普遍化（＝世俗化）せざるを得ない意識と、それを拒む歴史時空の多元性を引き受ける意識（二重の意識）とを同時に保ちながら歴史叙述をおこなう態度として、歴史そのものの通文化化（クロス・カルチュラライジング・ヒストリー）を提案する。

「よい歴史」と「危険な歴史」とのあいだには「乗りこえがたい距たり」（ギャップ）がある。にもかかわらず双方とも「実際にあったこと」を問題としている点では一致しており、グリーンジの歴史分析においても、近代実証主義とは異なる仕方です。「歴史への真摯さ」を紡ぎだしていると言えるのであって、この「経験的に真摯」であることが、グリーンジの「危険な歴史」を（第1章で質問者が心配したような）歴史修正主義とは異なった、他者に対して開かれた歴史にしているのであり、「この両者の交錯点にたち、『危険な歴史』をめぐる位相をエスノグラフィックに叙述しつつ経験的な歴史への真摯さ」をつうじた多元的歴史時空の接続可能性—ギャップ越しのコミュニケーション—をどこまでも粘り強く模索しつづける営み」[232]の企てこそが、著者の呼びかけであることが分かる。

こうして、グリーンジへの旅から戻ってきた著者は、再び主には歴史学者を念頭に置いて、しかしその背後に広がる歴史（学）に関心のある数多の研究者に問いかけるのである。本来なら、ここで物語りは一旦「終わり」とするところであろう。ところが本書には、本書の基となった博士論文が、どのような帰結を迎えたか、を巡る章がついている。

#### 「第8章 賛否両論・喧々諤々——絶賛から出版拒否まで」

本章では、[HOKARI2001 : Ch.8]の一部を編入した、グリーンジのカントリー再訪問で、博士論文の草稿がグリーンジの人々にいかに受け入れられたのか、が内省と共に呈示された後、著者の博士論文が3人の歴史学の査読者、オーストラリアの一般紙、英語圏の大学出版社の（おそらくは）歴史学と社会人類学の査読者及び日本の（おそらくは）歴史書を手がける書店編集者からいかに批評されたのか、各コメント・記事・メールの抄訳が掲載されている。

文化人類学を学ぶものにとっておそらく興味深いのは、ここで歴史学の査読者4人と新聞記者は、（1人は慎重に懐疑点も呈示しつつ）概ね好意的に、彼の問いかけを受け入れているのに対して、社会人類学者と編集者からはやや批判的なコメントが寄せられている点

であろう<sup>8</sup>。またおそらくは歴史書を専門としている編集者からのコメントの裏には、西洋性＝普遍性に対するもう一つの付き合い方が暗示されている気がする。

大胆不敵なこの章には、前章までを読み終えた読者の感想を、相対化する契機が埋め込まれている、と言えるであろう。

「著者によるあとがき」

最後に、著者保莉実自身による「あとがき」である。そこには「そのほとんどは発病以前に既にあった」本書では、「主体の解体、声の複数性、真理の不安定性などについて議論することをやめ、むしろそれを実践し、本当に知を内破することに挑戦した」かったことが述べられる。

しかし本書評の冒頭でも述べたように、著者は 2003 年 7 月に癌告知を受けたことから、2004 年 5 月に出版するまでに、本書がいかに複数性、多元性、関係性においてもたらされたものであったか、その謝辞が最大限の敬意と共に述べられている。

そして最後には、博士論文と同じく、一つの旅としての本書を世に問うた後に、著者の敬愛してきた歴史学者グREG・デニングの言葉を引いた後、著者自身の言葉で締めくくられる。「僕もこうして、一枚の花弁を投げ込むことができた。ゆっくりと爆発を待とうではないですか」 [278]。

### III 接続可能性

以上が本書の概要であるが、著者はもし病を克服出来たなら 5 冊ほど書きたい本がある、と言っていたという<sup>9</sup>。もちろんこの書かれなかった 5 冊の本の構想を正確に追跡することは不可能だが、本書から漏れた諸論文の問題意識も、当然のことながら本書のあちこちに既に埋め込まれており、本書で展開されなかった課題を論じた諸論文には、別稿を期する注がついていたものもある。そこで本章では、本書がどのような展開の可能性を秘めていたのか、を検討することで、読者に 5 つの接続可能性を促してみたい。

#### 1. クロス・カルチュラライズング・ヒストリー（通文化史）

まず著者の研究の当初からの問題であり [保莉 1996]、博士論文でも中核の 3 章（第 5～7 章 147 頁）を占めていたのに、本書で割愛されたのが、グリーンジ民族が 1966 年におこし

<sup>8</sup> 評者は、特に社会人類学者の評者は著者の戦略的術語を額面通りに受け取ってしまったことから、（カスタネダ事件から来たような人類学のトラウマティックな経験や先住民の土地権裁判を巡る経験などが想起されたのだろうか、）この強い懸念を表明したように想われる。読者の中にもこうした懸念をもたれる方がおられるかも知れないが、評者は寧ろ、それらの仕掛け（これについてはⅢ部の 4 で論じる）と彼の実践（これについては本書を読むだけでも推測はつく）とを検討した上で、彼がそれらの言葉で何を「言おう」としていたのかを見た方が生産的なように思われる。

<sup>9</sup> 著者の母親、桂子さんからの私信による。なお、この「5 冊」は、病中の経験について述べていたものなので、学問的な著作の構想ではなかったと聞いている。

た牧場労働の「ストライキ」を巡る歴史実践を再論する部分である。この問題意識の一部は公刊されている論文から読めるが、博士論文の第6・7章の部分は未公開に終わった。

しかし、グリーンジ民族といえば、オーストラリアではこの歴史的な事件によって、全国に名前を知られた先住民であり、その先行研究も多い中で、それらの研究が依拠していた文書資料と政治的な背景とを考慮し、多数のオーラル・ヒストリーを駆使して、事件が「ストライキ」と言うよりもカントリーの主体的再構築に従ったものであり[保莉 2003d]、錯綜する先行研究が、グリーンジの牧畜産業への態度と牛への態度とを混同したものであることを説得し[保莉 2003c]、グリーンジの歴史実践を包括的に論じたこの問題意識こそ、博士論文ではその結論に出るアカデミックな歴史とグリーンジの歴史をメタレベルで通文化化して「場所志向の歴史」を導くものであった [HOKARI2001 : Ch. 7,8]。

本書第2章、特に「開かれた可変的知識体系」の説明は、本書の第4～5章の分析には余り活かされていない部分に映るはずだが、おそらくこれらの説明はこれらの諸章のために用意されていたものなので、重要な展開の可能性を秘めていたことを指摘しておく。また、著者が [東 2001] を翻訳していた背景にも、こうした対象と主体とが自己言及的に通文化化する議論の事例の紹介を睨んでのことでもあったのかも知れない

## 2. アンチ・マイノリティ・ヒストリー (反周辺史)

しかし、著者の問題意識はアカデミックとグリーンジの歴史の通文化化のみにあった訳ではない。アボリジニの歴史がいくら取り上げられても、それが「マイノリティの歴史」として、結局は「ナショナルな歴史」の少数派・周辺として扱われる限り、歴史研究においてマイナー化されざるを得ない。

そこで、マイナー化されないマイノリティの歴史空間を設定するために、日本人とアボリジニの交渉史を取り上げ、いずれのナショナルな記憶を構成することも出来ないがゆえに、その周辺性と地方性が特定の場所を巡って接合する、アンチ・マイノリティ・ヒストリーの舞台が次の展開として準備されていた[保莉 2002]。実際、著者は研究会でも、この種の日本人とアボリジニの交渉史に強い関心を表明していたし、著者が体調の異常を感知したのも、オーストラリア北部の真珠湾産業の調査途上であった。この研究は、必然「各々の研究者がそれぞれの地域研究において遂行する少数民族や先住民族のネットワークに関する実証研究をジグソー・パズルのように繋ぎ合わせ」[保莉 2002 : 29]ることが必要となる。

この作業は、本書の第7章の「よい歴史」に還元不可能な「危険な歴史」の可能性を展開する変奏であり、それは「サバルタンの世界史」を探索する試みでもあった。

## 3. 白人国家の黒人カントリーにおける黄色いヤツ

だが著者は、何も歴史学の拡大再生産ばかりに関心があった訳ではない。実際、本書が成立してきた背景には、人類学的な調査・記述方法があるが、その人類学はまた知識や国

家関係における覇権性に埋め込まれてきたのであり、この考慮を外す訳には行かない。

そこで著者は2000年のオーストラリア和解評議会の目的が、先住民と非先住民だけのオーストラリア国民国家の（再）統合に閉じられていることを問題化し、ナショナルに回収されることのない先住民族問題の可能性という文脈から、先の交渉史を検討すると、そこには植民地収奪に加担した加害者としてのアジア系移民の視座が欠けていたことを指摘する[保莉 2003a : 69-73]。それゆえ開かれた和解には、世界各地の過去と現在をまきこんだ開放性が必要とされるのだが、そこでその責任を引き受ける際に「日本人」という同一主体の立ち上げに終わるなら、和解は再びナショナルに閉じてしまう。そこで、直接ある事件には出を出してはいないが、その事件によって今の自分たちがあるという「連累」への気づきを契機として、寧ろ主体の中に分裂と抗争を持ち込んで政治化する作業にコミットメントすることが、開かれた和解への責任の果たし方なのではないかと論じている。

この作業は、著者のもう一つの翻訳[ハージ 2003]とも重なって、本書の第1章から展開する可能性の一つであり、この問題では著者が最も「今後の課題」や「別稿を期」す、と書いていた[保莉 2003a : 71、77、79 ; HOKARI2003 : 99]ことは、注記に値しよう<sup>10</sup>。

#### 4. 絶対矛盾的自己同一

それでは、「ラディカル・オーラル・ヒストリー」「クロス・カルチュラライジング・ヒストリー」「アンチ・マイノリティ・ヒストリー」といった仕掛けは、このような著者の戦陣において、どのような戦略的意味をもっていたのであろうか。

この点については、著者がメタレベルの視点から書いたものは、公刊されてはいないのだが、幾つかの深読みをすれば、まず本書のタイトルには3つの候補があったことが注目

---

<sup>10</sup> 著者の論文で、目に付いた注記をまとめると、以下のようなものがあげられる。「グリンジのキリスト教理解の精査についてはまた別の（博士）論文を必要とする」[HOKARI 2001 : 29]。「僕にとって彼等（グリンジの若者達——評者注）は、『新世代のグンピン（アボリジニ——評者注）』としてのアイデンティティを確立しようとしていたし、グンピンのなやり方と白人的なやり方から『第三の路』を創出する路を見つけようともがいていた。とはいえ、これは今ここでの僕の研究フォーカスではない」[HOKARI2001 : 270]。「とはいえ、依然問われなければならないのは、植民地収奪に加担した者としてのアジア系オーストラリア移民の歴史である。この視座に立った本格的な実証研究は今後の課題である」[保莉 2003a : 71]。「日本とオーストラリアの先住民族が、戦後オーストラリアの真珠貝産業において接続した、その背景にある政治経済史、あるいは社会文化史は、興味深い問題領域を呈示している。別稿を期したい」[保莉 2003a : 77]。「著者は自覚的に、先住民族性の脱構築を本稿の主題とはしていない。ここでは、ガヤトリ・スピヴァクの次の一節を引用することで、さしあたり著者の立場とし、より詳細な検討は別稿を期したい。『「戦略」とは戦陣を敷いたコンセプト・メタファーであり、理論とは違って利害関係がない普遍的なものに由来していません。』（「一言で言えば・・・：インタビュー——ガヤトリ・スピヴァクに聞く」エレン・ルーニィ（聞き手）、長井香里（訳）『批評空間』II-3、1994年、p.46）」[保莉 2003a : 79]。「オーストラリアと日本のナショナリズムの個々の性質に関する包括的な研究は、より学術的な文脈の中で慎重に探求に値する、多くの興味深い論点を含んでいる。こうした係争点については将来別稿に期したい」[HOKARI 2003 : 99]。

される。一つは、モリス・バーマン[1989]を本歌取りした『歴史の再魔術化』[28]で、英語訳では『Doing History!』に、そして最終的には本書の題目へと落ち着いた。確かにこれは、普遍的な全体性を志向した認識と、周辺性と地方性との交通への参加との、交通と交渉と交叉点での接続を志向する著者の姿勢として一貫している。

また、著者が最後の読書会で読んでいた著作が、絶対矛盾的自己同位一という自覚を場所的論理として展開していた西田[1989]の著作であったのも示唆的である<sup>11</sup>。西田とえば、同様の対象を取り上げながらも、全体を鳥瞰しようとする井筒[1983]とは異なり、その論の構図が見え難いが、これは自らの視点が探求と共に変化してしまうからであろうと思われる（この姿勢がバーマン [1989] の「参加する意識」と呼応するのも見易い）。

本書で著者が呼びかけたのは、オーラル・ヒストリーのラディカル化だったが、それは、歴史自体のクロス・カルチュラル化（具体的にはグリーンジの「場所志向の歴史」を指すが、西田が西洋の「対象論理」と差異化した「場所的論理」は、西洋の「時間志向の歴史」と差異化したグリーンジの「場所志向の歴史」と重なるのも見易からう）と、その地位のアンチ・マイノリティ化という方向で「ヒストリー」の解放される空間を睨んだものであり、おそらくそれが、本書で著者が自らを「戦略的歴史学者」と自称した大きな射程であったように思われる。

それは何よりも、本書のあとがきにも表明されている「『…について』の議論ばかりしていないで、まずは自分で実際にやってみる」[272]という著者の姿勢の一貫した探求のあり方であったように思われる。

## 5. つながり

さて、ここにきて評者にも内容を補填し得ない可能性が一つ残ってしまった。

しかし著者は、病床から発せられた最後のメールに、次のように書いていた。「これは僕のがままなのですが、それでも大好きなみなさんといつでもつながっているという感覚がどれほど、僕を安心させているかわかりません。だから、どうか僕とつながっててください」。

それゆえ最後は、どうか読者の一人一人が、本書と接続して、この可能性を生じさせることでそれを開くことを期待したい。

最後に、彼の父親から筆者に向けられた最も重い問いは「それで、結局、『爆発』は生じたのでしょうか？」という問いであった。

## IV 爆風の行方

---

<sup>11</sup> 念のために注記しておくが、著者は2001年のオーストラリア研究会の発表でも「＜矛盾にたたずむ＞先住民——アボリジニの近代論」において、先住民の矛盾を考え抜く存在様式を西田の「絶対矛盾的自己同一」に絡めて言及しており、また病床にあっても瞑想をしていたので、この読書は死期を覚った病床で急に始めたものではない。

では、その後、爆風はどこへ向ったのであろうか？ ここでは本書出版の後、本書を巡って行われたゼミナール、読書会、シンポジウムなどの「爆風の行方」を見ておくことにしよう。

本書の元となった博士論文は、既に本書出版前から国内外で引用されていた[モーリス・スズキ 2004 : 290 ; Rose 2004 : 67]が、本書出版後、一連の書評は 2005 年をもって一応の終結を見せ、本書は徐々に国内の他の論文[松山 2005 ; 細川 2005]にも引用され始めるようになった。

だがその終結を待ったかのようにして、新たな動きが 2006 年から始まった。

4 月には本書の問題提起であった、どこにでもある「歴史実践」をめぐる、シンポジウム「歴史実践へのまなざし」が慶応義塾大学で開催され、戸邊秀明（早稲田大学）、今福龍太（東京外国語大学）、藤川隆男（大阪大学）、岩崎 稔（東京外国語大学）らが塩原良和（日本学術振興会特別研究員）の司会で発表がされ、『歴史学研究』では 2 回に亘り、オーラル・ヒストリーの特集号が組まれた。

5 月には 2004 年から発足していたニュー・サウス・ウェールズ大学の保苺実奨学金に次ぎ、オーストラリア国立大学でも保苺実奨学金の公募が始まり、これには姉の由紀さんがアメリカと日本とオーストラリアの繋ぎ役となって奔走した。

6 月には九州大学で、フィリピンのアエタの民族誌を発表し、その後も NGO 組織と共に支援して来ている清水展が、福岡を中心とする研究者やその院生達と運営している読書会で、本書の発表とクリティカルな議論を行った。

8 月には著者が 2002 年に召集したカンファレンス「スピリチュアリティのありか——聖なるものの経験と記述」[BENNETT&HOKARI(eds.)2006]が公にされた。このカンファレンスは、著者がアカデミーの中で師事していたデボラ・ローズの「まえがき」やグREG・デニングの論文「信じることの考古学、あるいは、異郷としての自己」を含む 11 人の著者からなる。そこで、著者自身は、「歴史の再魔術化——アボリジニのスピリチュアリティを書くこと」で、本書第 1 章と接続可能性 4 と呼応する主題、すなわち、日本でもポスト・オウム以降に生じた「世俗化の力学」に抗して「歴史の再魔術化」をいかに開き得るのかを論じている。

2006 年度末には *Japanese Review of Cultural Anthropology* で、日本人によるオーストラリア先住民研究史に、著者の仕事も紹介されたが[IJIMA2006]、このレビュー自体、本来は著者に依頼されていた仕事であった。評者は生前の著者からの恩義にわずかなりとも報いるために、この仕事を引き受けたが、著者が書いていればこのレビューも全く違ったものになっていたであろう。

果たして、本書の爆風の行方がどこまで響きを残し、また、どのような響きを反してくるのか。そうした残響の行方を見ることもなくして、著者はかつて詩人が書いた少年の姿のように[谷川 1988]、大きな旅へと立ってしまった。

「さようなら」  
ぼくもういかなきゃなんない  
すぐいかなきゃなんない  
どこへいくのかわからないけど  
さくらなみきのしたをとおって  
いつもながめてるやまをめじるしに  
ひとりでいかなきゃなんない  
どうしてなのかしらないけど  
おかあさんごめんなさい  
おとうさんにやさしくしてあげて  
ぼくすききらいいわずになんでもたべる  
ほんもいまよりたくさんよむとおもう  
よるになったらほしをみる  
ひるはいろんなひととはなしをする  
そしてきっといちばんすきなものをみつける  
みつけたらたいせつにしてしぬまでいきる  
だからとおくにいてもさびしくないよ  
ぼくもういかなきゃなんない

謝辞 本稿は著者のご家族及び編集者の援助なしには書き得ませんでした。不躰なインタビューを海容に受け入れていただいた御両親の保莉信男さん、保莉桂子さんの厚遇は言うまでもなく、仲介の労をとって頂いた姉の保莉由紀さん、書評を入手する援助を頂いた橋本育さん、また草稿原稿にコメントをいただいた、保莉桂子さん、保莉由紀さん、橋本育さん、窪田幸子さん、飯郷友康さんに本当に感謝申し上げます。

#### 参考文献

東 浩紀

2001『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』講談社現代新書

池見 陽

1995『心のメッセージを聴く』講談社現代新書

井筒 俊彦

1983『意識と本質——精神的東洋を求めて』岩波書店

谷川 俊太郎

1988『はだか』筑摩書房

新潟市総務部市史編さん室

1989『図説 新潟市史 新潟市史別編一』新潟市

西田 幾多郎

1989 (1946) 『自覚について 他四篇——西田幾多郎哲学論集Ⅲ』 上田閑照編 岩波文庫  
灰谷 健次郎

1974 『兎の眼』 理論社

ハージ、ガッサン

2003 『ホワイト・ネイション——ネオ・ナショナリズム批判』 保莉実・塩原和良訳 平凡社

バーマン、モリス

1989 『デカルトからベイトソンへ——世界の再魔術化』 柴田元幸訳 国文社  
細川 弘明

2005 「異文化が問う正統と正当——先住民族の自然観を手がかりに環境正義の地平を広げるための試論」、『環境社会学研究』 11 : 52-69

保莉 実

n.d. 「純粹新潟高校批判」 『パルセウス』 6号

1996 「アボリジニ部族経済と牧場労働—— グリンジ族土地所有権運動の歴史的背景」 『オーストラリア研究』 第8号 : 14-27

2002 「アンチ・マイノリティ・ヒストリー——ローカルかつグローバルな歴史へ向けて」 『現代思想』 1月号 : 20-32

2003a 「オーストラリア先住民とジャパニーズ——開かれた『和解』のために」 『オーストラリア研究』 第15号 : 65-79

2003b 「生命あふれる大地 アボリジニの世界1」 『新潟日報』 6月17日

2003c 「カントリーの生命を維持するために——牧場開発とアボリジニ」 スチュアート・ヘンリ編 『「野生」の誕生——未開イメージの歴史』 世界思想社 : 162-187

2003d 「オーストラリア先住民の牧場退去運動——オーラル・ヒストリーからの接近」 『歴史学研究』 No.783 : 1-18

松山 利夫

2005 「歴史像としての白人像—オーストラリア先住民のオーラル・トラディション」、藤川隆男編 『白人とは何か？ ホワイト・スタディーズ入門』 刀水歴史全書 73 : 136-146。

宮本 常一

1976 『生業の推移』 日本の民俗 第3巻 河出書房新社

モーリス・スズキ、テッサ

2004 『過去は死なない—メディア・記憶・歴史』 岩波書店

ローズ、デボラ B.

2001 『生命の大地——アボリジニ文化とエコロジー』 保莉実訳 平凡社

BENNETT, L. R. &HOKARI Minoru (eds.)

2006 *Locations of Spirituality: Experiences and Writings of the Sacred*. Australian  
Research Center

HOKARI Minoru

2001 *Cross-Culturalizing History: Journey to the Grindji Way of Historical Practice*.

ANU PhD thesis

2003 ‘ Globalising Aboriginal Reconciliation : Indigenous Australians and  
Asian(Japanese) Migrants’ IN *Cultural Studies Review*, Vol.9 No.2 : 84-101

IJIMA Shuji

2006 ‘Australian Aboriginal Studies in Japan,1892-2006’ IN *Japanese Review of  
Cultural Anthropology*, Vol.7:51-70

Deborah B.Rose

2004 *Reports from a Wild Country: Ethics for Decolonisation*. UNSW Press

参考ウェブ

<http://www.hokariminoru.org/>